

ジョージア (グルジア) 便り その47

『眠れる森の美女』が初演を迎えるまで』

文 高野陽年 text by Yonen Takano

130年前の帝政ロシアの首都サンクトペテルブルグで皇帝アレクサンドル3世の庇護のもと『眠れる森の美女』は制作された。

作品の舞台はバロックからロココにかけてのフランス。ロシア人の永遠の憧れの地である。ロシア宮廷ではロシア語ではなくフランス語が話されていたというし、宮廷の使い手としてのダンサーにはフランス語教育がロシアでは施され、僕らより少し世代が上のダンサーはフランス語に堪能なものが多し。前時代を否定したロシア革命を経てもフランスへの憧れは残り、『眠れる森の美女』は大切に後世に受け継がれてきた。

今回『眠れる森の美女』がトビリシのオペラ劇場の舞台におよそ60年ぶりに戻ってきた。新たな舞台装置、衣装、演出である。振付ももちろん原作に敬意を払いつつ現代的なクラシックバレエの解釈が進められた。

この作品で一番重要なのは踊りのスタイルである。おとぎ話ということもあって、深い心情をあらわす演技はあまり求められないが、指先や顔のつけ方など独特なルールがある。よく教師から「それではプティパ（原作のフランス人振付家）の匂いが香ってこない」と指摘を受ける。どう見てもアジア系

の僕がフランス人の持つエスプリを醸し出すのは至難の技だが、かといってフランス人がそれを得意とするとは限らない。求められるのはあくまでも「ロシアが憧れるフランス」なのである。

新作（改訂新作）の制作はいつもにも増してリハ・サルは増えるし、肉体的精神的ストレスも大きくなる。しかし新たな創造物の一端を担う事は何にも代えがたい。成功への近道はない。舞台装置、音楽、踊り、衣装、照明のクオリティを個々に上げていくしかない。

舞台装置の絵の具の一筆一筆が照明にあたる事でその凹凸が舞台に奥行きを生み出す。最近では高性能プリンターで背景を描くことも多いようだ。プリンターで作った幕と絵の具で描かれた背景では遠くから見ると差がわからない。しかし照明が当たると雲泥の差が出るのだ。

衣装は体にフィットするようになるまで踊っては解体し縫い直す。ダンサーの体は個性差があり、そのうえ激しい動きが加えられる。普通の洋服を着ようものならばものの数秒で破けてしまいうだろう。こうすればフィットするといったような説明書はないので、整形手術を施すかのように、切り込みを入れてみたり布を継ぎ足していく。

オーケストラの音楽もチャイコフスキーが意図する音楽の深みを出す事は容易ではない。全ての奏者が3時間の間、正確に一つ一つの音符を弾くことが優れたハーモニーを生み出す大前提である。

そして最後に僕らダンサーがスタイルを極限まで追求する事で初めて観客の前で披露することができるのだ。

さまざまな葛藤を経て初日を迎えるわけだが、特別に緊張する瞬間でもある。それは130年前も変わらなかったであろう。しかしプレミ

アの夜を踊る事はダンサーにとって一番の榮譽であり、僕はいわば劇場の顔としてこの総合芸術作品を世に送り出すのだ。終幕後に開ける

シャンパンの音は祝砲だ。今までの苦勞も、踊りの反省点も一旦このシャンパンの泡とともに今日だけは消え去っていく。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

